

四天王彫像

——十世紀の基準作例を中心とする形制の考察——下

猪川和子

Ⅲ 奈良法隆寺講堂四天王像に近い形式の像

二軀が相称で、一軀が右手あげ、多聞天が左手に塔を捧げ、右手は下に下げる形式をもって構成される法隆寺講堂の四天王像の形式に近い像をあげると、

岐阜願興寺像

天台宗、蟹薬師として知られ、山号「大寺山」と称した。江戸時代「可児大寺」と幕府へ、尾州表へ「願興寺」、叡山へは「真成院」と記した文書が残るという。六世珍算の大寺記（一七三〇年作）に、伝教大師が創められ、長徳二年（九九六）に薬師堂を起工、同四年落成、十二月入仏供養、導師は覚運僧正であったという。天仁元年（一一〇八）源義綱の乱に薬師堂炎上、同年再興、後嘉禄元年（一二二五）美濃国地頭頼結康能により四天王、十二神将が出来たとする。現在本堂内に薬師三尊、十二神将、四天王が安置されるが、十二神将は鎌倉時代の作で像高も小さく、四天王像はそれに比し、九尺近い堂々たる像であり、その中多聞天一軀は明らかに鎌倉時代以後の作である以外、三軀は各部分に後補のあ

とが著しいが明らかに平安時代の作である。

新納氏の修理調書を参照しつつ記すと、持国天は極彩色、左手をあげ鉾をとり右手を腰にあて、獅嚙をつけた左足を踏み出す。頭部首柄さし、耳にたてに矧目あり。兩肩矧付、左手肘中央横に矧ぎ、肘より袖下に至る部分も矧ぐ。袖先、左方腰部より裾まで前後に矧ぎ、兩足矧ぎ、胴體兩側で矧目たてにあり、背面下中央部たてに矧目あり。像高二七〇センチ。増長天（寺では広目天の位置に置く。ここでは寺にならう。）は左手伸下、独鉈をとり右手をふりあげ太刀をとる。左膝少し屈し、邪鬼の腹をふみ、右足頭をふむ。像高約二七〇センチ、邪鬼・持物共後補、広目天（寺では増長天）像高二六一センチ。多聞天は、この像だけが後補で、ヒノキ材である。寄木造前後左右矧、首柄さし、兩脚別材で矧付ける。像高二七七センチ。

調書によれば右のごとくであるが、右手をあげ三鉈をとり、左手を腰に独鉈をとる像を持国天とすれば、相称形をなす、左手をふりあげて戟をとり右手に独鉈をとり腰辺りにおく像が増長天とされよう。そして広目天は右手をあげ太刀をとり、左手を垂下して独鉈をとる像ということになる。この四天王の名称もこのように今は確かめられない。持国天は

多聞天

挿図12 岐阜 願興寺四天王 広目天

持国天

増長天

同上

左手肩より先、胴からずんどうの脚部のすべてが後補らしく、顔だけはかなり優れた藤原彫刻であるが体軀は殆んど後補といえよう。増長天も同様、もとの姿をよく残していると思われるが、下半身には各部分に修理があり、岩座に立つ脚などは古い時期の後補の様である。広目天は藤原彫刻の優れた造法を示し、丸々と太い体軀、強靱な腰の張りがある。足は柄さしで邪鬼の上に立ち、顔は赤い。袖や裳裾にかなり顕著な旋転渦卷文を彫出、巧みな手法を示し、堂々とした体軀の均衡、端正な忿怒

相、甲の細部の破綻のない処理等十一世紀末から十二世紀初めの像としてむしろ古様を感じさせる。多聞天像のみは生々しい誇張の多い相貌、乱れ波うつ衣文など、一見して時代の相違が知られるが、ほど同大に造られ、形式的には近づけようとする意図が明らかであり、当初の多聞天像の形式を踏んでいるものと解し得るであろう。

京都淨瑠璃寺像

豪華な彩色文様と切金で包まれた端麗なこの寺の像は、数多い四天王像の中でも優作である点で注目される。従来その構造上、左右矧ぎでなく、前後矧ぎであることが、玉眼を造る時代に近づいているから鎌倉時代的であると考えた金森氏説は、前後矧ぎの構造が必ずしも時代の下る形式ではないことが知られる現在、寄木形式自体から鎌倉時代などとは全く考えることが出来ない。

この四天王四軀の形式を見ると、多聞天以外は二軀が右手をあげ一軀が左手をあげる形式であって、それぞれがどの天部であるかについても従来の諸書を見ると著しい混乱を示している。^{註20} 本堂内に安置するには、須弥壇外の床面しかなく、しかも四軀を安置するには窮屈で、不自然であることは、現状を見ると明らかである。他の彫像の作風に比較すると、浄瑠璃寺における最も古像と思われる、三重塔の薬師如来像とは、彫刻様式の点、また彩色の手法等すべて異質であって、同系と考えることは出来ない。また、九体の阿弥陀如来坐像の、本尊の作ゆきは端正な定朝様であるが、他の八体は、素朴な本体の肉取り、精粗の差のある螺髪の様式等、かなり不統一な造型を示すことに比べても、九体阿弥陀像と一具の護法神将像として作られた像とは考えにくい。浄瑠璃寺流記事と名づけられている記録にも確たる記載もないところからも、あるいは後に他から移安されたのではないかと考えられる像である。

この四軀の像の形式は十世紀の法隆寺講堂像に近いが、造型的には作風系統を同じうする像ではない。一軀について二十種近い精妙な文様と変化に富む切金文様の組合せは、彩色文様及切金文の発達の様相からみて、鎌倉時代の仏画との親近性を指摘された説もあるが、装飾文様の上

限を定めることは難しく、像の造型的な特色において、他の鎌倉時代の四天王彫像、例えば康慶作の興福寺南円堂像、定慶作の同寺金堂像などと比較すると、その形制からして全く異質であり、上記した一群の平安彫刻の形式にとけこんでおり、さらに同形諸像の中でも造型的にぬきんでており、格調の正しさに改めて瞠目させられる。興福寺金堂の定慶作の像などは鎌倉期の復古的な気風に基くものか、持国天が宝珠をとり、多聞天が右手に塔を捧げる形であり、これは彫刻にはあまり多くない作例の一つであり、^{註21} 図像としては陀羅尼集経に説く系統に属している。四像とも大きく裳をなびかせ、体軀はくねり、衣文の彫出も文様を彫り出すなど煩瑣な形で、表情も写実味が加わり誇張が大きい。彩色も大きい花文が大まかに配され、鎌倉時代復興時の彩色通例の要素を示しており、繊細巧緻な浄瑠璃寺像とは全く異質である。浄瑠璃寺像の古様できりと締った顔つきは静的であり乍ら内面に力がこもっている。衣文も重く垂れる彫り方ではなく、引きしまっている。つまりこの四軀の像は構造・彩色文面とも鎌倉時代に置かれる理由が稀薄である。^{註22} また、四軀の中で、多聞天像のみを別格に古いとして説かれる説もあるが、^{註23} これも四軀時期を同じく調査を行ったが、造型的優劣をとりたててあげることは出来ず（挿図15）、各軀それぞれ優れた作であると思われる。全部に焼けたあとがあるという説も、調査の結果、全く根拠がないとわかった。下地の漆が古色をおび、にじみ黒ずんだ個所の誤認と思われる。このように端正、且つ華麗な像は、一体何時頃にその造立時を考えると、十世紀末の年記のある総持寺の蔵王権現像毛彫に近いのではないかと想定さ

れる。十世紀末から十一世紀を頂点とする藤原氏や朝廷における造像はどの様なものであったであろうか。多くの作例を通観するのに、華やかな彩色文を端正で重厚な作風の中に溶けこませている浄瑠璃寺像の如き唯一の作例にその系列像の手がかりを求めうるのではないかという期待をとどめ得ない。近年東博保管の広目天とされる絹素をとる像の胎内から彩色文乃至切金と関係があると思われる面相筆等が見出された。^{註24}光背も、支柱の付根の宝相華花文もほとんど当初と考えられる。

愛知普門寺像

この寺は行基開創と伝え、現在は古義真言宗に属している。この四天

持国天

増長天

王には塔を捧げる多聞天が見られないが、四軀の形制の上から、宝珠を捧げた持国天と考えられている天部が、後補の持物である宝珠の代りに宝塔を置いて考え、多聞天とするのが妥当であると思われる。多くの四天王彫像例中、持国天が宝珠を捧げる例は、興福寺金堂や、観世音寺等の例があるが、いずれも塔を捧げる形の多聞天像が別に含まれている。多くの例の中、塔を捧げない形式の多聞天像の例はごく稀である。四軀

持国天

広目天

の形制上の分類ではここに置かれることが適当と考えられる。四軀とも寄木造、ヒノキ材である。

新納忠之介氏の調書にもとづいて各像について記すと、右手をあげ刀をとり、左手を腰にあてる形の像を持国天像とすると、頭部を胴體に柄さしとし後頭部でたてに短ぎ、背面右膝、裾左下方で短付ける。兩手は肩、手首で短く。像高一七一・二センチ。左手をあげ戟をとり、右手を下げる形の像を増長天とすると、この像は頭部兩側及左耳前で短付、胴に柄さしとし、胴は兩側で短く。前後短である。左胸上部、左肩にかけて短木があり、右肩、右手臂より袖にかけて短木、手首、袖先、左沓先をはぐ。像高一七一センチ。持

四 天王 彫像

挿図13 奈良法隆寺講堂四天王 多聞天

広目天

国天、増長天は兜をかぶる。広目天は後頭部兩側、胴の兩側でたて短ぎとする。兩肩、手首、袖の外側等を短付ける。この像は齒をむき出す。像高一七六・六センチ。多聞天像は寶珠を左に、寶棒を右に持つ。珠は後世塔が失われた時に補ったものと思われる。頭部耳後にてたてにはぐ。顔の右耳の邊りにたてに短木がある。首柄さし。兩手は肩、手首で短く。像高一七五・四センチ。広目天、多聞天は髻を見せる。

四軀細身ではあるが、整った作である。ただ表情等はかなり写実的な気分が強く、十二世紀も後半に入っの造像と思われる。この寺の近くから、保元元年（一一五六）の年紀ある銅經筒や、唐草、雲文、双鳥文等

挿図14 京都 淨瑠璃寺四天王 多聞天

増長天

を配した和鏡が出土している。高野山末となっているが、もとの状況は明らかではない。

山口(防府)国分寺像

この像は未見であるが、四軀の形式が一応このグループに相当するの
でここに置く。等身大で、近時、近世修理らしい表面の彩色を落し、藤
原的な姿をあらわしている。邪鬼まで一木を主とした造像らしく、古様
の像である。

IVの六波羅蜜寺像については前述した。

次にVのグループに属する像について記すが、広目天の姿に特色があ
り、手に経巻と筆をとる形が多い^{註5}。この形式は鎌倉時代に入って多く行
われる形式に近いが、左手に塔を捧げる多聞天^{註26}、及び持国、増長天の形
式がこの一群に近いので、ここに加えた。広目天の持物は殆んど後補
で、後世の作為によっていると考えられる像もある。この形式の像は藤
原末頃の作が多い。

兵庫東楽寺像

東楽寺は古義真言宗高野山末である。現在四天王は聖天堂に安置され
る。いずれもヒノキ材で、邪鬼も共木である。もとは一木であったと思
われるが、中に柄で頭部を体軀に接合するものもある。

持国天は頭部を柄で体軀に接合、兩肩で兩手を短く、兩手先は後補であ
る。左足先、邪鬼も後補、背面内割を施し、背板をあてる手法であるが現在
欠失。顔の中央に耳目が寄り、目はみひらき、縁に刻みがある。衣文の彫出
は薄手である。江戸時代の彩色を大正十三年修理の際剝がし、その時腰の
ひねり方から増長と考えられる像ともども手の後補の部分を改作したとい
う。總高一三五センチ。増長天は同様頭部は一材で柄で体軀にさしこむ。總

高一三三・
三センチ。

廣目天も略

同じ。兩肩

で胴に柄で

接合、總高

一三三・三

センチ。多

聞天も略同

總高一三

三・九セン

チ。持国天

左足先と邪

鬼の部分に

後補があ

る。増長天

も持国天と

耳形も同じ

で鼻目が顔

の中央によ

り、目はみ

ひらき縁を

彫出。衣文の彫り浅く平板に仕上げる。増長天の邪鬼の表情はよい。広目天
の兩手は古いらしく、齒をむき出す顔つきである。邪鬼および背板を受ける
部分に柄が残っている。邪鬼に欠失あり。多聞天も兩肩より別木であるがも
とのもの。右足先欠失。

挿図15 浄瑠璃寺 多聞天 裾部分

同 広目天 裾部分

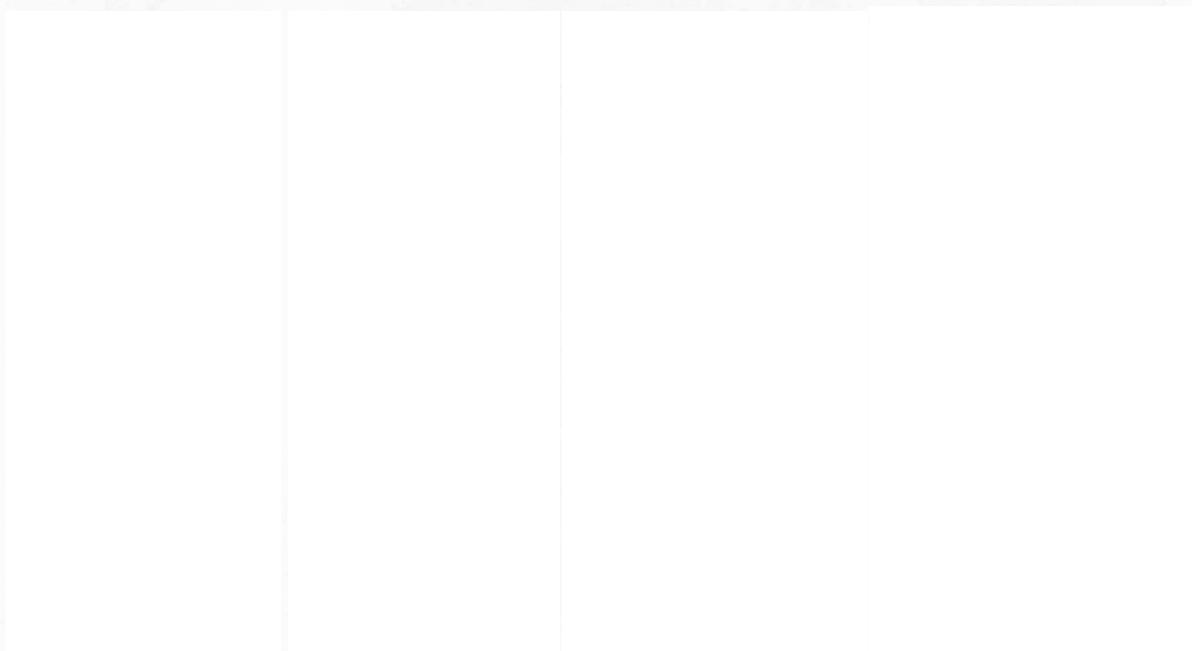


挿図16 愛知 普門寺 多聞天

広目天

増長天

持国天



挿図17 山口 国分寺 多聞天

広目天

持国天

増長天

総体に古様に作られるが、衣文線の彫出の浅いことや、ヤ型にはまった造型である点、十二世紀に入っの造像かと思われる。

兵庫大乘寺像（図版Ⅳ）

この寺も現在は古義真言宗で、行基開創と伝える。形相は東楽寺像に近く、持国増長は呵咩をなし、広目天は上歯をむき出し、多聞天の表情も似る。胸甲の角ばった深い彫出など、甲の制もよく共通する。この像は頭体一木、持国増長天とも元は邪鬼も同木であつたらしい。

持国天は右手をあげ三鉈をとり、左手を腰にあて右膝を曲げる。西村公朝氏の修理書によれば寶髻、左袖一部、右手首、天衣、背面裾一部は後補である。像は布下地、内刳がある。兩肩で兩手を短付、邪鬼は共木である。頭の左部分、左の耳も後補である。像高一三五センチ。増

長天は左足を曲げ左手をふり上げる。邪鬼も同木、兩肩で短木。体軀ふとく、動勢があり、背板は別材、内割がある。頭部は兩耳後より咽喉にかけて割りはぎ、内短りする。体軀は背面襟下から割りはぎ、内割をする。像高一三六センチ。廣目天は兩手先、右沓先、持物後補、邪鬼は別木。全身に布をきせ彩色のあとあり。上齒をあらわし、沓の後で下半身を前後短ぎとする。像高一三二センチ。多聞天像は兩肩にて別木。首から下は前後短状、前面頭體部は同木である。右手首より先と袖先一部、左腕、右沓付根より先まで

後補、左足膝より下別材ではぐ。像高一三二センチ。この四軀もおだやかな藤原末期の作風を示す。

滋賀冷泉寺像

持國天は、山形寶冠をかぶり、焰髪を見せる。左手あげ、戟をとり、右手腰にあて、左膝をまげ、邪鬼を踏む。裳先に、白下地の上に朱の文様のあとが残る。像高九六・九、邪鬼二一・三センチ。増長天は左手を腰にあて、右

増長天

持国天

増長天

持国天

手をあげ三鈷をとり、右足邪鬼の頭を踏む。像高九五・七、邪鬼二一・〇センチ。広目天は像高九九・五、邪鬼高二〇・三センチ。多聞天は臺座邪鬼後補、一〇一・八センチ。増長天の左足を除き沓先を足舕前部と共に矧付ける、四天王いずれもヒノキ材一木、兩肩で矧木。肩より先は皆後補らしく、原形は明らかではないが現狀によってここに置く。

この四天王は千手觀音像と共に、もと近くの曼荼羅堂の像であったものを、信長の乱の時に寺が焼け、冷泉寺に移されたと伝える。小像であ

挿図18 兵庫 東樂寺四天王 多聞天

広目天

るが引締まっております量感に富む。

和歌山金剛峯寺小像

左手をあげ、右手を腰にあてる像が持国天、増長天は右手をあげ三鈷をとる。広目天は、左手は胸の辺りにものを持つ形で右手は下げる。いずれもヒノキ材、像高七九・八一八四センチの一木造りの小像で、姿態の均衡をやや失う点や、型通りの甲の制、衣文を刻むところから十二世紀頃の作と考えられる。持物、天衣、光背等は後補である。

京都醍醐寺像

挿図19 滋賀 冷泉寺四天王 多聞天

広目天

持国天

醍醐寺金堂に安置

される四天王は像高

二二四から二三〇浬

の大きな、動勢のあ

る像で、前方の二軀

は古く、広目、多聞

は後に補われたとい

増長天

う説があるが、明ら

かではない。形制の

類似によってここに

あげた。^{註27}

広目天

その他の、兵庫西

光寺像は三軀のみ完

好で、広目天が欠け

ており分類が難しい

が、三軀の形制から

大体この一群の中に

含めてよい像と思わ

れる。藤原時代の作

である。

和歌山 持国天は左手をあ

げ鉾をとり、右手を

腰に左足をあげて邪

持国天

増長天

西光寺四天王
多聞天

兵庫

挿図21

鬼を踏む。
鬼は像と
共木で彫
出される。
像高一二
六センチ。
増長天は
右手をあ
げ左手を
腰に、像
高一二五
センチ。
多聞天は
一二六セ
ンチ。皆
寄木造、
内刳があ
り、全身
細身で、
彫法も簡略化し、衣文浅く、やゝ地方的な素朴なところがある。

四

以上記した一群の諸像の形式の中、I~IV^{註28}までの形式は、既にのべたように十世紀の諸像では天台宗に関りある寺院に好まれ造られた像の形式ではないかと推定され、その後の造立になる諸像もまたその形の影響

を受け、あるいは踏襲したものと考えられる。平安時代中期における天台宗の隆盛は、延喜天曆時代より、尊意、延昌、良源等の座主が輩出し、加持祈祷隆盛の時代を来し朝野貴顕に重んぜられた。その勢は、僧房の再興さえはかくしく行なわれなかった高野山の衰亡が物語る真言宗をはるかにしのいだとも言われる。十・十一世紀における道長の法成寺、後三条天皇の円宗寺をはじめとする四円寺、白河天皇の法勝寺他、天台宗の活躍が想像される造営が相次ぎ、これら諸寺院の法会は、天台三会と後世にも名高い円宗寺の最勝会、法華会、法勝寺の大乗会の如く、天台宗と密接な関係があったと思われる。これらの諸寺院に安置された諸像の中で、四天王像の占める位置も小さなものではなかったであろう。叡山止観院に造られた四天王像の一例として、山家最略記に次のような記載がある。

梵天・帝釋四天王像等事各高立五尺
永承三年造立之

本願主攝政太政藤原良房忠仁公

四天王像

多聞天 西北方 左捧宝塔 右杖鉞 踏二鬼

持國天 東北方 左提太刀右持宝珠 踏二鬼

增長天 東南方 左提太刀右提鉞 踏二鬼

広目天 西南方 左持鉞右持索打々也 踏二鬼

已上四天王頭光皆輪光上有火焰三所

とあって、九世紀に摂政太政大臣藤原良房が発願し、永承に再興された四天王像の形式が記される。これは、島根清水寺像に近く、持国天が宝珠を持つている。広目天は索をとり、多聞天は塔を左手に捧げていたこととか、光背の形は、浄瑠璃寺像などと同形である。

この小論に記した諸像の形式は、ここでは一々の具体例をあげないが奈良時代の諸像、平安初期像の多くとはかなり別種の形式で、現存の古い作例としては既述したように十世紀中葉からの諸像にほゞ求めうる。これは、中国影響の強い奈良時代の諸像とは別の、新しい要求によって作られた形式の系統とも考えることが出来、いわゆる平安彫刻における和様化への流れの一端をここに見出すことが出来るのではなからうか。そしてその最も整美された時期、おそらく十一世紀から十二世紀初頭において、浄瑠璃寺像のような華麗でしかも彫刻的生命が内部にこもっている名品が生れたのではないかと思う。

本稿は昭和四十三年度科学研究費（一般研究）による「四天王彫像の研究」の一部である。

註

(18) 「浄瑠璃寺四天王像の造立年代に就いて」(日本彫刻史の研究―河原書店刊)

しかも、新納氏の修理の際の図を参照すると、浄瑠璃寺四天王像の寄木は、金森氏が説かれたように前後短ぎではなく、もう少し複雑である。例えば、持国天の脇面部には頭部、体軀ともに縦に短目のような線があり、增長天には顔の正面に二本の筋があり、広目天にも正面中央に短目とも見える筋が見られる。現在図解のみが残っており、記録がないために明確ではないが、それらの筋が皆単なるひび割れを示すものとは思われない。とすれば、前後短ぎであるという前提がくずれることになる。これは今後の精査の機をまたねばならない。

(19) 最近までに明らかにした藤原中期以降の年紀ある多くの造例によれば、金森氏の述べるように藤原中期以降は左右短が基本という説は成立しない。治暦五年（一〇六九）の聖徳太子像の如く頭部体軀が一木で彫出され、後頭部で前後に割短して内刻を行う構造の像が多く見出される。寛治七年（一〇九三）の興善寺釈迦如来坐像も略同じであり、寛治八年（一〇九四）の年紀のある大阪滝谷不動明王寺の不動三尊像も、堅一材で作られ、両耳後から裳裾にかけ、堅に割短ぎ内刻を施し、本尊はさらに頭部、

体部を三道下で割り短くしている。また、忿怒相の十一世紀の像としての不動明王像の相貌は、筋肉の張りや、左右の目の一方をかなりそばめて誇張を現わす点が、動的な要素となっており、浄瑠璃寺四天王像の相貌と比べて、浄瑠璃寺像が鎌倉時代の作であると考えねばならない根拠を見出すことは出来ない。十一世紀の寄木造の例のみをあげても以上の通りである。

(20) 小林剛・森蘊氏共編「浄瑠璃寺」

(昭和三二年、鹿鳴荘出版部刊)では右手をふりあげ、左手に戟をとる像を持国天、右手をあげて剣をかざす像を増長天としており、新納忠之介氏編「浄瑠璃寺文様」(昭和五年巧芸

社刊)においては、右手をあげて剣をとる像を持国天、右手に索をとる像を増長天、右手をあげて左手に戟をとる像を広目天、とするという状況である。西川新次氏他著「阿弥陀堂と藤原彫刻」(昭和四四年小学館刊)においては、剣を右手にかざす像を持国天として、索をもつ像を広目天としている。

(21) 現在持国天が宝珠を持つ作例としては、前出の島根清水寺像のほかに奈良興福寺東金堂四天王像、同じく興福寺金堂の定慶作の像、それに福岡観世音寺四天王像、があり、この三例はいずれも右手をあげて宝珠をささげ、多聞天もまた各々右手をあげて塔をささげる。他の二軀の形制には各寺、多少異ったところがある。また古くは開羅二年(六八二)ごろの創建と考えられる南朝鮮、慶州感恩寺の西塔出土の銅造舍利容器の外箱外面四方に貼付けられていた銅造浮彫の四天王像にその例が見られる。塔を捧げる多聞天は邪鬼の掌上に、他の三軀の一部は獣座が残る、整った作の像である。多聞天以外の一軀が左手に光焰を放つ宝珠を捧げており、(報告書ではこの像は

挿図22 京都 浄瑠璃寺 広目天 胎内納入品

増長天とされている)。七世紀における四天王像の作例として、宝珠をもつ形式と宝塔をもつ形式の二軀が明らかに含まれているのは興味ふかい。持物が失われたり、変る場合の多い中で、このような形制の明らかな例は重要である。画像においては持国天が宝珠をもつ例は陀羅尼集経に説く形式を图示したような「図像抄」所載の図像一〇七―一一〇の例(大正蔵図像三)、陀羅尼集経では多聞天が塔を右に捧げると記されるが、多聞天が左に塔を捧げるところが異っている。「別尊雜記」の図像二四六―二四九(大正蔵図像三)の例においても、持国天が宝珠を捧げている。これら画像の場合もまた持国天が宝珠を捧げ、かつ多聞天が塔を捧げる姿に画かれている。

(22) 同じく浄瑠璃寺に建暦二年頃造立されたと考えられる吉祥天像があり、これが納められていた厨子には四天王が描かれている。(美術研究九四号参照)この四天王像は、興福寺北円堂四天王像の持国天が交叉手を示すと同形であり、東大寺戒壇院の四天王像にも少し近い。いずれも右手に塔を捧げている。扉絵は興福寺金堂の定慶の四天王像が復古的気風を示すと同様に、復古的な図柄と考えられるが、これが浄瑠璃寺における鎌倉時代の四天王の形式を示す一例であるとするならば、浄瑠璃寺四天王彫像のそれとは非常に異質である。

(23) 前出、註22 小林剛氏の説

(24) 東京国立博物館に出陳中の広目天像の剥落止めを行うに際して、美術院国宝修理所長西村公朝氏等が胎内より発見されたもので、約一八センチの面相筆に近い細い筆一本(A)、約一五・五センチの筆一本(B)、約一三・八センチの筆一本(C)、細い竹の一四・五センチ長さの断片中途からささら状に割ったもの(D)、他に木屑漆の固まりや木片(漆と彩色のある小片もあり)などが発見された。Aは穂先が黄白色で軸に近いところに朱色の顔料らしいものが残っている。穂先長さ約一・三センチ、軸の先が斜に切られており、これは、神奈川称名寺弥勒像胎内納入の切金用具と考えられている竹の形と似ており、最近の中尊寺金色堂解体の時にも堂内から同形の竹管が発見されたが、何れも関連のある形と考えられる。Bの穂先は毛が褐色で、一本々々光沢がある。しかし当研究所保存科学部、見城敏子氏の紫外線照射による調査によっても、はっきりとした螢光とはとらえにくい。顔料に僅かに膠質が残るらしいということがわかった。Cの筆は穂先がちびてわずかに黒く、穂先に近い軸の部分が太細の竹で二段の構成になっている所が延喜筆と呼ばれる構造で、古様であるという西村公朝氏

の話である。Dの用途は明らかでない。(挿図22)

(25) 広目天像が手に経巻と筆をもつ形相であることを記すのは、「般若守護十六善神王形体」(大正藏經二二卷)に毘盧博叉善神肉色 懸黒絲臂 以筆作書寫之勢 被甲胃 著綠色衣服 鬢髮赤色 微笑形也——とあるのが唯一らしく、他の経軌には見出されないようである。忿怒相が当然であると考えられる四天王像中で微笑の形をなすというのも奇妙に思われる。金剛智三藏訳とされるこの経の巻末に若干の疑問の附記が見出される。Vのグループの像は、広目天と思われる像が、両手を軽く屈けて胸前で何らかの持物を持つ形式に作られており、中には経巻と筆を持っている像もある。このグループの像には、十世紀にまで遡って考えられる作例はないように思われ、IからIVのグループの形式の像が、十世紀の作例であることが明らかなるものが含まれているのに比べ、やや後に多く作られるようになった形式とも考えられる。たゞ持物は必ずしも経巻と筆が適当であるとも決めることは出来ない。

挿図23 岐阜 横蔵寺 法華曼荼羅

(26) 多聞天が塔を左手に捧げる形に作られる彫像の例としては他に、奈良西大寺、大分真木区、三重市場寺、法隆寺新堂、京都寂照院、奈良興福寺南円堂、東大寺法華堂、焼損の東寺食堂像などがある。塔を左手に捧げるか右手に捧げるかは経軌の編者も注目したらしく、高野山真別処円通寺本「図像抄(十卷)」巻第九、天部上、四天王の項で、北方天の像法を、「左手同前執鐺拄地右手屈肘擎於仏塔」私云此四天神色何東大寺大仏殿北方天紺青——東寺講堂北——紺色、右手持塔、太途同東大寺様敷」と説き、図にもその形を画き、その塔を右手に捧げる形が東大寺仏殿の四天王とはほぼ同形であると説く。奈良時代以前の四天王、及平安初期像(これらの中には塔を失っている場合もあるが、形の上では右手に捧げていたらしく思われる作例が多い)、鎌倉時代の作例の殆んどが右手に塔を捧げていることについてはまた次の機会に記す予定である。これに対し、画像では「叡山本大悲胎藏大曼荼羅卷上」(大正藏図像第二卷)の坐形の毘沙門天王、「胎藏旧図様」の坐形の多聞天、(大正藏図像第二卷)「私云此本同陀羅尼集經但多聞持物左右有異」と註記のある「別尊雜記」四天王の図二四六、北方毘沙門天王、(大正藏図像第三卷)「覺禪鈔」卷二六仁王經上、五方曼荼羅中の北方多聞(大正藏図像第四卷)、宝楼閣曼荼羅の多聞天(大正藏図像第五卷)などかなりその例は多い。

(27) Vにあげた中世作の岐阜横蔵寺像は、文和五年の奈良靈山寺像の誤りである。

(28) 美術研究二六三号に掲げた四天王彫像の形式分類の中、IIの兵庫円教寺像の系列に置かれる作例を水野敬三郎氏の示教によりもう一例加えることが出来た。岐阜横蔵寺の板彫法華曼荼羅(挿図23)である。竪一八・五、幅一六、厚さ約一・五センチ、釈迦多宝が塔内に安置されるのを中心に計二十二尊が刻出され、四隅に四天王像が配される。左上の索をなびかせる像は広目天と考えられ、従って下方右は持国天、左は増長天という配置であろう。この法華曼荼羅を納める厨子の内部に朱書があり、「赤栴檀法華曼荼羅伝教大師入唐求法之時 唐道邃和尚授与之 則唐三藏法師天然ヨリ伝來濃州横蔵寺什宝」と記されるが、この板彫曼荼羅は渡来品とは考えられないので、什宝としての伝称にとどまる。しかし、天台寺院として長く法燈を伝えた横蔵寺にこの伝称をもち、この形式の四天王彫像を彫る板彫像があることは興味深い。浮彫として固定した配置を示す例として、金剛峯寺九尊像の四天王に近い服制、姿態である点注目される。ほぼ同時期の作であろうか。